土屋正義編輯

征韓石崇軍記

第三編

九

遠
2269
29

遠14
2269
29

繪本石山軍記第三編卷之九目録

○教如上人石田の制止を悖り給ふ
　並ニ岐阜黄門秀信上人を勸ふ
○秀信卿義勢上人の帰京を助く
　並ニ大樹家康公東本願寺造營

○岐蘇駒ゞ嶽より本願寺の棟梁を伐出せ
并戸隠山の隠士ゝ奇譚

猶本石山軍記第三編巻之九

土屋正義編輯

○教如上人石田の制止に悖給ふ 並びに岐阜黄門秀信上人を勸る

這時教如上人三成へ稟されそゝ出家沙門ハ御陣見舞に出入成ぎ
き儀も候ふまゝ別して得川内府公に於てハ大閤御存生中よりして
隠居登城の儀を御嘱ひ給ふり御懇情蒙りたる俺躬ち出塵
桑門の徒ハ猶殊更に禮節の道ハ欠ぢかゝぢ候ふ談殿御賢辨に預
りさゝと押ゝ下向を望まれそゝをば邪智深き石田三成もあゝぐふ術
ゝく下向届けを聞濟ふして教如上人佐和山御出立ゝて自是尾張
参河路へ立距給ふ然るに石田ゞ寵臣嶋左近友之原筒井順慶ハ智
の家臣ふり

謀軍畧勝れ〜武士ゆへ主人三成を諫めて云様彼上人ハ僧徒の産れと雖も信長公の為數年石山に籠城〜軍師鈴木重幸ゞ智謀乃條々數度の軍に見聞すゝ自分に釵戟を掌にふまず〜も軍配籌策ハ多年自得すゞ〜就中介父小悖り開城せず信長の女效謀を折く英才天晴勇壮膽量の擧止尋常の武士乃逮ぶ所にあ〜ず然ハ今般関東への下向と謂も内府懇情あり〜恩に報んと奈何ふる謀畧を牒さんも知ず坊主出家の長袖にも短炮管鎗を隠し持人情油断大敵と存ずゞ則ハ是非に下向を止め給ふゞ味方の御為ろて候上ゞ〜と前後比較〜て勧め〜ゞ三成實ゆ〜注意けきバ猛可に使節を仕立て後を逐せ參忽鳴海の邉ゝて追着て再三下向を押

留むゝ教如上人使節の者に曰ふ様俺們綷既り隠居の躬上原来一所不住三界無庵ふり東國祖師の御舊跡を心乃侭に順拜致〜度序に御陣見舞旁斯下向致すところに候ふふり那謂百田氏ゞは俺們ゞ旅行御届け稟すに止め給ふハ拙僧大きに本意を失ふゞく軍中危ふ〜との御心添ふ〜バ御氣曖ひ御無用下さはゞし假令死す綷出来ふすとも因業因果と諦む則ゝ何國で果とも覚悟の上ふり這旨達〜給ふまゝと返答ありて介侭行向へ急ぎ給へバ使者も道に主人乃企白状に云出〜もふ〜わゞむゞ脚踏で亦寒々と佐和山さ〜て引歸〜けり恁く教如上人ハ道中恙ふく下野國小山の御陣へ日數十四日經〜着到〜給ひ御陣見舞の由云入給へ

ば得川家の老臣本多佐渡守正信固より本願寺宗門歸依にく敬
如上人と別懇の間柄ゆへ今般の御下向御奇特ものとて早速主君内
府公へ言上す内府家康公此由聞し召れ上人を御前に御招き有て
遠路を厭ずに遥々の來訪實意乃禮参最辱ふし〳〵御感悦ふし
給ひて種々御馳走仰せ付らるを家康公上人へ尋ねて曰く貴僧京
都啓行の頃何とう巷談猥説ハ無り〳〵や不審の條も見聞あ〳〵ハ秘
まず告給へ〳〵と問給ふ教如上人答へ〳〵稟さきけるハ拙僧御陣
中御見舞の為下向届けを仕らんとて江刄佐和山石田殿まで相届け
に参り候ふ所三成拒んぐ〳〵無用に為べき旨強て制止稟され候へども
拙僧出家の節志を稟〳〵て押〳〵下向に進と来るに三成亦々参及鳴

海の駅まで使者を馳〳〵後逐参り只顧俺下向を制めんとすその趣
意一圓心得難く色々断りて罷り下る候ふ倩愚案に窺ひ省るに
石田殿乃言中何とふくして君に意趣ふても有ゞ如く且京摂乃
間何ゝ物騒しく難波兵庫堺浦ゝハ西國四國乃兵船共追々入津の
風説も承りぬ奈何も異変乃有べき結構御用心有て然るべ〳〵と
秘まず言上〳〵給ひ〳〵きば家康公打笑給ひて然ぞ介綽ありと
計り曰ひ後ハ何共仰せ無り〳〵とりや自夫不日に京摂飛脚小山の御
陣営に到着〳〵て石田小西們謀反の次第伏見桃山落城の綽ども委
細に注進有ける由人家康公上人へ曰ふやう逆徒京摂乃間ゝ墓
バ本坊兵燹の程も測り難ゝ貴僧隠居の躬ありと雖も尚本坊

に凶変有りしきハ亦残念乃儀も無に非ず三成貴僧の下向を制め
しハ京摂の容子を俺ゞ方へ内通ありと思ひ把しゆく夫と謂ハず
拒みされども早く引返して帰京あらバ貴僧も難ずべき條も有ゞ
ど後日此方と對戰に逮びて后ハ弥貴僧を間者と疑ひ道中通行
妨げもやせん三成大問の逝去有しを已ゞ私望乃時節と心得俺
秀頼の後見を拓く思ひ東西に逆籏を飜して逮ぶ大望遂んと
為ばぞ緯の障碍と者ら此ぬ様随分早く帰京し給へ一亂静まら
ば上洛と、頓て對面すべしと御懇切の御詞厚く添給ひ々れバ
教如上人惶て承諾し給ひ仰せふ随ひ禀すべしとて直様御暇乞
禀し上給へバ家康公道乃翼にし仰せられ嶋津黒と号けし名馬

を上人へ餞別に賜ふ教如上人有難く御請ありて翌朝
小山を御出立にて再び東海道に懸り給ふ然るに尾張の地に入給
ふまでハ得川屬の大戸領分ゆへ道中故障ふく来られし所同國
清洲の城下へ着給ひつゝ行向の噂を聴把給ふにたゞ石田三成ハ本
城を出軍し濃州大垣の城へ出張を構へ京摂の通路を差停むる由
旅客ハ僧俗論ぜず往返ふしぶにと巷の評定喧しく々きバ教如上人
ハ帰京成ぐゝき上嚮に石田乃制止に嫌り給へど三成の憤りを察
明し給ひ奈何もして無難に通らバやと一日清洲の城下に御逗留ま
しく支器の御生質ふ水ぞ御工夫ありて一固の謀事を案じ出され
俄に一通の書翰を認め給ひ一個の下僕に仰せ含られ同國岐阜の大

守ふりける織田中納言秀信卿の藩臣出方弥治右衛門同じく藤
藏と云同胞の者へ今般関東下向の轉末を述られ歸路の途中に通
行閉がま殆迷惑云様も非ず伏て冀くば其許御同胞の多年有信
乃芳情を以て主家の御威光を恵み給り教知旅中の進退困惑
御助勢下さゝば有難うん偏に御周旋乃程希ふにそと石田小押
留せられさり〳〵前條の訳も委〳〵述て出方同胞の人へ憑まれ
這出方弥治右衛門同胞ハ本願寺宗無二の信者にして教知上人殊
に入塊の間ふかぐ斯文通を以て賴み給ひしふり抑織田中納言
秀信卿と稟すハ故右太臣信長公の嫡孫にて織田三位中將信忠卿
の息男初名三法師磨の御縡あり先年光秀の逆乱遁れ給ひ秀

吉疎意ふ〳〵之を勦り豊臣の天下一統乃後美濃國岐阜の城主と
ふして百万石の大主と封ぜらるゝ縡偏小秀吉公乃仁計ふかぐ秀
信卿も常に之を忘れ給ふ既う光秀の為に絶べき家名を秀吉
乃情に再興を得て斯百万石の主と成縡一方あるまじき恩人ふりと
て深く秀吉公を重ず給ふ依之今般石田小西の輩秀賴公の御賴
みと偽り得川家康公を相敵把て天下動亂の兵端を引出し中國
四國西國および豊臣恩顧乃大小侯を大概欺き味方に屬れば秀信
卿も石田に欺さまき竟に一味同心致さゝける然バ教知上人支畧乃
名僧ゆへ今時機に臨み変に應じて出方同胞乃懇家に基づき秀
信乃會釈を賴み給へり出方同胞痛ハ〳〵く思ひて俺們を御憑ふあ

教如上人
下野小山の
本陣小詰
玉堂画
教如上人

石山軍記三編巻之九
厭離穢土欣求浄土
家康

うんとうハ御城中へ自ら蒐込有て主人秀信殿へ直談あるべ宜く御愛ひ禀さるべきより上人城中へ御入乃儀ハ俺們宜く執計ひ仕らんと密に使へ返答しけるバ教如上人大きに御悦びきゝ従者纔に三個を召連らるゝ出方同肥ゞ案内を以て岐阜の城内へ入せ給ひ秀信卿へ御對面し給ひ途中難儀乃次第仰せ〻ゝ偏に御救ひふ預り度旨思ひ入る御頼み有るゝバ秀信卿にも御幼年乃刻光秀乃為必死に陷り前田徳善院に救ひ出さゝれ十死一生乃場を遁れ〻〻縡成長の後度々聞し召るゝバ尓躬の昔に思ひ競べて非除得川方の人にも甚窮鳥懐中に入則ハ猟師も之を取ずと云り殊に祖父信長の累恨も怨ず明智光秀の悪逆を憎ゝ羽柴家に加勢を約し門徒の者へ廻章して山崎の大戦勝利と成しも全く顕如父子一致の義勢明智の暴威を折くが故と厥ち大問御譚有しとあり然らば本願寺ハ俺家に把て怨を忍ひ報ずる志節遺ハ佛氏乃心操感に堪こと今以前後を能慮ぬ恐ゝ救ハずんバ有べからずと頓に承引有て城中に留め無事に御帰京させ進まべしとて大丈夫り請込禀さゝしけるば教如上人ハ安堵の思ひをなし暫く御休息し給ふ中出方弥治右衛門同肥ハ素より帰依乃知識おゝ種々心を尽し饗應乃秀信卿ハ即時に使者を以て大垣乃石田方へ遣ハさゝ使命の趣き云せるハ本願寺乃隠居沙門教如綽関東帰路の上京道往返通行関を居へらき上京難儀に進ぶ趣き其の許へ憑ゝ出らゝ候ふ柔門の躬おゝバ通さ

る迚も障碍有べく儀ハ候ふまじ速に通路許し給へとの口演あり三成
さ水を聽く思惟々るハ先日関東下向届の砌り俺両度まで差停絶
しのぐも採用せずして下向しさるは頗る俺を輕蔑せし仕方あり管
す関東の間者と成て俺大望の裏を掻べき計較顯然として省へ透さ
りくり召捕へんふ如べくばとく邪曲の心に疑念も深く秀信の使者を
呼て稟しけるは彼僧嚮に俺詞を用ひず強く関東へ下向あせしハ尓
心底愈心得難し俺に面向して分解あさに岐阜に到るく噯ひ乞ふハ
必定心裡一物の有證據あり今既に東西手断の時節何者にもあれ猥
に通すべくばと知や彼僧ハ内府入魂の者文覚院宣を頼朝に與ふこ
如く出家ふりして心緩く難く拷問せば密事の内謀首狀させん繹

俺手裏に有去ふぐく暫く責を差恕して尓御許に捕へ置給へ合
戦終りて後計ひ稟さんと返答して使者歸りけまバ秀信卿ハ案に
相違して此旨上人へ仰せ聽らるに教如上人些も驚き給ずず俺僧
の躬にて衆生化益し今来の一大事を教導の役目ふり奚で塵世の
俗情に親ミ人事の横害を好ざらんや軍中に使役する抜ハ十悪の中
乃禁法して候ふ石田殿俺下向の刺に強ちに制め給ふりしかども箇様
の騒動出来せん繹ハ豈図らんや夢にも存ぜず東國にて夙説承ハりし
少駅路の難ふらんに急ぎ祖跡順拜の志願も得遂ず歸京せ
途に述ぶ所斯の仕合せに候ふゆく黄門君秀信を庇陰を希へに無事
に通し遣さんとの御事欣喜罷在候ふ所ろ石田殿尚も疑心を狭んぐ

斯の如く稟〻送らるゝと存じ候ふ拙僧黄門君の御救ひ願ひ上ハ
如何様とも能に計ひ下さるべし假令此侭命を召るゝ共寃枉に果る
も因縁約束隠居の俺躬て候へぞ些しも厭ひおく候ふとて打ゆき
〻〻仰せられしかバ秀信卿も俺詞の立ざるに耻給ひ再び石田方へ
稟し遣ハさるゝ様ハ教如僧綜此方に於て得与吟味小逮び候へども
疑ハしき儀聊も之おく秀信請合稟して候へバ関所御通し給とる
べしとて再三綜を分て御憑み有ども意地深き三成猶聽入ず彼法
師此方へ遣ハさるおバ詮議致すべしと返答〻重バ秀信聽より大
きに怒りて三成奈何おれぞ我意に募つゝ無禮の返答とて奇怪ぬり
俺今中納言に任ぜ〻れ美濃一國乃主将なり今般大坂の味方お

せしも石田以下の為にハ非ず幼君秀頼殿を思ふゞ故ぬり然るに三
成先達て俺を勧め一味同意を憑みふゞ今にてハ已れ大将の思ひ
をふして斯まで俺を易く扱ふや僅に出家一個を通さんとて両度迄
憑み遣すに飽まで我意を張而已おゝず此方へ送らバ詮議せんとハ
秀信を踏着さる稟し分おぬり俺も一旦請込さる上ハ一命に替て
も道通さでやハとて血氣の若大将怒り憤り再三使者を馳て大垣
に到らせ教如綜此方に於て吟味を遂仔細おゝと稟し遣ハす所ふ
聽入おく詮議を做んと稟し越る條秀信頗る面目失ふ所ぬり此
上ハ教如を同道仕りて秀信自ら上京せんと欲す貴殿之を停めん
と思ふまゝおバ軍勢を出して停めふと秀信之を蹴散して通るゞ

きゝ貴殿武士乃躬として用捨を知ずや僅の憑こを許容ざる
綷行季とても面白ゝ〳〵と屹度稟〳〵送られしゝバ三成大きに迷
惑ーて偖々一徹短慮の大将ゝふ若年ゝるゆゑ前後乃辨へふ〳〵然れ
再ぬて挑こ爭ひふバ却て青をむき出すべ〳〵奈何せんと工夫を凝し
て漸に得心乃返答をそ做ふゝふ遁ハ信長公乃孫君程ありて勇
言を放つゝ威ひを示し倘介返答に依時ゝは味方破約ーて関東
に屬石田に淡吹せんと思ゝまゝーを石田も秀信卿を敵としてハ味
方十分乃弱身とふゝぞ大事乃前の小事ありとて上人乃通路不
承知ゝゝも竟に秀信卿嗾ひく任ーゝゝ秀信卿今年二十三才と
云々

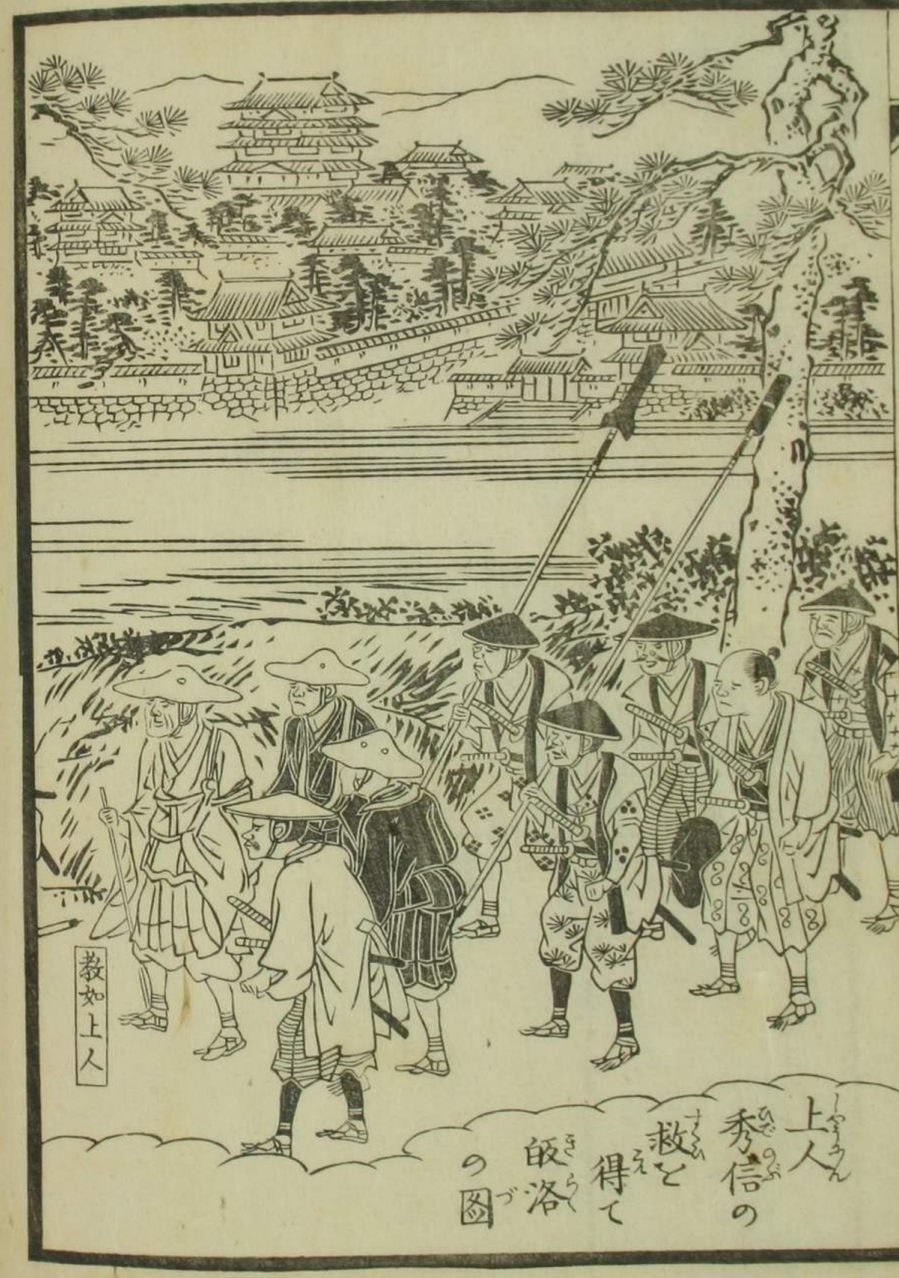
○秀信卿義勢上人の歸京を助く 並びに内府家康公東本願寺造営
偖も石田治部少輔三成ハ間者間諜乃後患を思ひ別ゝく教如上人ハ
幼年より石山籠城の中に成長軍師重幸ゞ謀策見慣數年軍略熟
得有綷人皆之を能く察ゝるゆゑ今般内府公〳〵の陣見舞ハ石田素
より氣に喰ず思ひ倘諸國乃門徒に下令ー内府へ合躰させて諜し
合せ俺本城佐和山へ押寄て不意を討せん計畧ふゞせバ此大垣に留
り在綷忌々敷味方の大事ふるゝーと彼此安堵難く思ふゝ雖ゝ秀信卿に遮まゝきバ流石の石田も味
方の大虞未ゞ軍に逮ゞぬ端ふ不平の間に到るを恐ふて是非ふく秀
信の嗾ひふ應ゞ関所通路許ーたりゝり介時三成使者に云々る様

ハ再三仰せ越るゝ口演の趣某用ひざるにも非ねども恁る時節にも僧法師ゝも了事注意すべきに候ふゆへ是軍中の必要に候ふ貴君御請込と仰せの上ハ支へ稟さず御通し有べし併大勢の人數通行ハ相成ず教如上人と徒弟両三輩ハ差許し稟すべゝきども其他の従者ハ止置るべしと尚も狐疑して返答すれバ使者立帰りて恁と告々り秀信卿漸怒りを和らげ斯と告給ひしゝバ教如上人困して稟さゝれゝかハ従者を途中に止められて甚ざ以て不都合に候ふ談儀用捨を下さるまじきやと問せ給へば秀信卿打笑ひ人數を屬ハせぬハ三成の狐惑間者を避る内心あれ共大志を思ひ立にも繹少し大敵を受る軍と成てハ奚ぞ間者刺客を恐れざふんや併ハ儀を氣遣い有べゝず俺宜しく計ひ稟さんとて上人の近習用人を始めとし外他百人計りの従者を清洲より呼寄城中へ引入秀信卿俺手の家来に打扮上人ハ御徒弟三個を従ひ秀信卿自ら送り稟されしゝバ道中の関所々々も滞りなく無事の通行なし給ひて江州なる四十九院（江及大上郡高宮と云地所まで秀信卿ハ送りとゞけゝ帰らきける此所ハ則ち本願寺の末寺江及の鮒頭乃坊主衆有所なり談遣ハ皆以ゝ門徒なるゆへ自是京都に到るまでハ道中妨げる者非ざりしゝバ上人御主従魚の網漏る心地して漸都へ帰りゝぬひつ秀信卿の慈情の愛ひ深く歓び給ひしゝとや去程に翁年の九月十五日濃州不破郡関が原に於ゝ竟に東西大合戰に逮び西方を勇

将豪傑多し〻雖も張本さる石田小西の輩素より奸計邪謀の籏立ふ[illegible]ぞ自然〻従軍一致小至ず就中小早川金吾中納言秀秋密に得川内府公へ内通して裏切の方策を行ひ〻ば西方大軍ふれ共惣敗軍し勇将の面々數多陣没し加之張本石田治部少輔三成小西摂津守行長安國寺恵慶の三将悉く生捕られ入牢〻ふり尚亦残黨降参も有バ知行没収せ〻ル〻浪士するあり得川内府公勝利を得給ひ茅出度上洛ふし〻給ひ々きバ教如上人も大津の駅まて御出迎ひ有て祝し〻給ふ恁〻内府公ハ洛内外を静謐せしめ伏見の城を修理し〻給ひ〻暫く之に入せ給ひける偖石田小西安國寺等ハ謀反の張本さる大罪ふより六條河原へ曳出して三個俱小首を

刎らるき永く悪名残〻けるこそ遺ぞあ望この省せ〻ゆ成ぞし偖まて教如上人ハ御賀びの為伏見の城へ御登城ありて内府公御拜謁を許され上人東下下向石田の為に再び関を塞ぐき通路ふ〻ずぎよ岐阜黄門秀信卿を依頼〻愛ひを請て帰京ふ〻ける絣の一伍一什を言上〻給へぞ内府公甚ぞ感賞ま〻〻頓智謀畧孟賞君にも了事勝れ〻方便ふりして大きに御讃乃御詞給より俺今般の軍に勝利を得る絣貴僧の為〻も幸甚ふりと種々御馳走仰せ付られ〻ふり厥ち内府公諸老臣を聚めふれ本願寺隠居坊教如遥々関東陣見舞の義信武士も逮ぞぬ忠節舉止忌賞せずんバ有ぞう〻ぞ依て〻一寺を興立して興へんう既ふ大閤在世の時〻も内々

武者画


教如上人
上人秀信の救と得て飯洛の図

此綜仰せ有しうゞも朝鮮軍役に隙ふく棄るゝふくゝ汰無りに
々り彼僧ハ素是顕如の嫡男一且本寺住職に居りし人ゝり然れど
も先住乃遺書有ゝて尓母堂の歎訴頻りふれぞ大閤ゝも黙止難
く思されし哉竟に教如を退職禀し付らまき末子光照准如上人の綜
家督命ぜらる斯れぞ今般元に轉して教如を以ゝ本寺再住さ
バ満足ふゝんうと仰せ有に老臣本多佐渡守正信禀しける上
意の如く教如上人綜今般君を重んじ東下の参向ハ衆士に超ゝふ
忠義に候ふ如何様ゝも御執立有て然るべし去ふゞら本寺再住
仰せ付らるゝハ是ハ宜しゝらずと覚へ候ふ尓儀ハ門徒の僧俗帰
依の宗門再び教如相承と成るし時ハ見冐偏頗の夙説ゝ落く

却ゝ宗門相續の障と成るべし一且大閤の釣命ゝも候へバ門下の者
們の氣配に拘ゝり内亂生ぜんも亦測り難し殊に先住の讓り状
を以ゝ母儀の訴へられゝ故廉に候へぞ之を廢して再住せん綜孝
道不悌の非に落べし教如上人至孝の人ふふぞこそ謹慎して退
職致さんとり熟往昔今時を思惟るに本願寺洛東大谷に初めて
造建せられゝふより以来山科石山鷲の森貝塚諸所幾度ゝふく
移轉有綜門徒們不安心の一固にゝく候ふ然れぞ今般本寺を二ヶ
所に建則ち教如上人を以ゝく新に造立の精舎に居へらまき是も本
願寺ゝ稱号せしめ東西ゝ別ち門徒を勧め宗風を輝す様計ゝふ
給ゝぞ倍々宗門繁昌しゝて故大閤の思しゝ召も相立母儀の願ひも空

しかゝぐ候たん且教如准如両人も兄弟の道不平に到らず先住も無本望にさゝ存ぜらるゝきんと最正實ゆ言上せゝゝば内府公大きに御意にかゝゆひ正信の所存至極の仁計ゝゝ俺心に至當ゆせゝ汝ゝ稟す如く計らひ得させば門徒李々に到るまでもゝゝ信心決定安堵して法脉不退轉の基ひゝ成ん急ぎ介旨稟ゝゝさんと竟に御評定相究りゝまさば殿ち内府公伏見よりゝて上洛参内在々ゆ歸るき上人の隠居邸へ成せらるき御土産ゝゝて細布三百反白銀三百枚を下しゝらるき御茶をめゝ上らゆつ敷刻御話説の序に内府公上人へ仰せらる様ハ貴僧熊々東下の見舞家康殆感心ゆ堪ず依て介忠節の心賞ぜんが為今般別ゆ一字の

坊舎を營ゝ是も本願寺と稱号呼ゝゆ宜く両本寺ゝゝて修造せん御躬宗風を亂せざる様に相續化益致さるゆゝば家康ゝ於ても満足に思ふゆり愈真宗の繁昌とゆゝば祖師への奉公廣大無量且御躬の隠居せゝゆゝ綜本意ゆく思ふ門徒も有べく別寺宗法興立ゆさば其輩も歓喜ゝて信心増倍ゝ御躬の徳行世に顕きゆん予不日に地所を撰ゝて修造寄附すべく思ふゆゝ勉強して住職せゝるべゝと殘る方ゆき御上意ゆれば教如上人ハ介御仁命乃旨骨髄に徹りて忝く感涙を流ゝて拜荅ゝ給ひ實に尊命の條々有がゝく不徳乃拙僧再び世に出別に本寺を許され此上の身乃本懐や候よべき偏に枯木に華の咲心地ゝ君恩生々世々忘るべか

らずと低頭平身して拜謝し給ひ終日御饗應盡されるに内府
公も御機嫌よく還御あり程なく土木乃有司に命ぜられ本願寺の
地を撰索あるに東西兩寺然るべしとて東六條烏丸に地面を縄張
し教如上人へ御朱印賜りしば慶長七年寅正月下旬より早々に
御普請に把かり給ふ得川源君大檀越と成せられ家臣を屬そ
御下知あれぞ諸職人雲の如くに集り信心の門徒們ハ僉上京して
宗門繁昌の基本ありしとて勇み歡びて上人へ願ひ冥加の為佛恩
報謝の為一工一力の御手傳をば御免許下さるべしと稟し出て群
参して働きけるにぞ實に信者の他力失ずさしも大厦高樓玉
殿向も年月累ず落成ふおよぶ教如上人御歡び大方ふ〳〵ぶ良辰

を選み御移轉したまふ則ち是より東本願寺と稱し別當職乃
備ふり給ふも最芽出度ありける縡ども教如上人此ときに御年齢
ハ四十三歳に成せ給ふと云傳ふ專ら世俗乃言習俗すにも前尼本尼
刎尼の年に幸福を向へる人に於てハ尒人かまふずず生涯富德充る
云上人一且退隱し給ふと雖も得川源君の御看出を得給ひ四十三歳
より復職せられ久かハ高德無比の大知識と謂べし

○岐蘓駒が嶽より本願寺の棟梁を伐出す并ぶ戸隱山の隱士乃奇譚

東本願寺御普請の前諸材木を取寄らるに御影堂乃梁に用ゆべ
き乃巨材を諸方に索やるしど太身と間數短小ふるゆへ尒用に當る
べき良材ふし茲に信刄筑摩郡岐蘓の山中駒が嶽の深山にハ大木數

多生出る中にも高さ三十余丈に餘りさる栗乃大樹を省出し得にゝ
り根の周り百圍に逮べりとゝん是ぞ大梁に用ゆべきの最究竟の良
材ありとて樵夫杣人們に多く下令し難ふく根より伐倒し つゝ枝葉
を除ひ皮把さりて偖山路を轉ぢ〳〵曳出さんとゝ為に餘り數丈の大木
ゝ山ぢ繫ぐべき乃大綱もゝく此深山の嶮岨道をゝ曳動すべきの手術
もゝく門徒の道俗老若男女ゝゝ摭み果てぞ省へゝりける然るに
同國更級郡ゝる戸隠山乃麓り卜居しける一個乃隠士人歩に打交り
談郡民の中に在々る所性名を埋ゝ人と交加緯を好ず一向宗門の信者
と省へゝ持佛堂ゝ住開山上人の真筆乃名号を安置し念佛乃外他
事ゝりゝるゞ此時隠士彼栗乃大木の容易に引出し難く如何せんと

衆議さまゞに時日を迂し俺曳出すべしと云者ゝりきバ隠士省かれ
て諸人に打對ひ詞静りに語りて謂様総て大樹を曳動すにハ先最
初に道造りを堅め障る所の岩石を把除ひ山路の凹凸を平均して坂
を修理し次に水流の力を借ずんバ幾ても人力にてハ進ぶべゝず談山
中四方樹木に埋れ溪澗目に遮らず〳〵雖も倩地脉と地理を考ゝに
岐蘓河の水流此邊に有ん試ゝに捜し省給へと云りきバ門徒の老若
心元ゝく思ひゝゞ手段に盡さる時ゝりゝ隠士の詞に随ひつゝ生
茂りさる葦を押ゝけ澗水や有と捜し廻れバ尓地所より僅ゝに五六丁
計り乾兌の方に當りたる所に果して水聲鼕々さる響あり原来
此邊に溪水ハ有とて遥下方を臨み省れゞ緑水岩を洗ひて漲りこび

尓深き綷測量すべくもず衆人之を看て大きに感じ彼隠士こそ凡常の人にあらぬ将小佛の化身あらんと敬禮すること限りなく澗河着當りしを告にくまバ隠士點頭て下知して曰く昔流きこそ岐蘓川の水源なり急ぎ道造り岩石把除凹凸の難所平均し給へ大樹ハ國小把てハ将軍なり亦家に把てハ棟梁なり道造妨害の物を除くハ君上敬恭の禮法小して爭此侭引動すべきや況く佛殿の梁りとなれバ唯各々の敬禮信力を以て引出し給へと励まし給バ衆々實々と承諾して岩石を把除け新道を造り諸木を引拔引倒して大概山路六丁計りを平均く道開きるに多人數ふ小ず幾日と累ず既て道普請成就せしバ卒去ず大木推遣やとて猶も近在近國の門徒を集め老若を論ぜず諭しすめて

貫目數千斤の重きを曳ハ男女乃黒髪を断切て縄小縷夫を以て牽て緘と付て心力盡して曳出すべバ如何なる重き石杭なり共容易動し扱るとなり面々宗門の本寺新建の期際佛恩報謝乃為と思ふ黒髪を断切て索に制り功德を後代小遺さんなバ萬德圓満乃陽報子孫に逮ぶすべし宗門の為ハ戦場に臨み陣没したる者も幾万人先亡乃忠節思ひ競べ断髪簡易にして尓功深りるべし勉めよと勧めくまバ信心の門徒們一議に逮ぶず俺一に黒髪を雑て索に縷彼大木を幾重とふ緘て索の端長く垂して手に手に之を扯張せて紙幣を振て音頭り合し曳さとかけ声出させ力合せて曳動しくまバさしの大木も數千の人乃尓精力に動ぎ

出して平均しさる新道條をおり〳〵と推動ぎ出るに彼隠士ハ大きに勇みて猶も音頭を都合つ介躬も後方より両手をかけ念力極めて推出々きハ衆人一致の精神こゆれバや難ふく数丈の渓間の崖際へ漸々にして推来り々るの僅六七尺計の崖際に到り之を渓間へ突落すべき力量出者無り々きバ隠士之を省て憤励し諸人に對ひて稟しける〻徐達平生如来を頼み念佛唱ふハ唯終焉正念乃一大事あり今該大木を曳し介如く一大事の崖に臨みて精力落して用果さすバ肝心乃往生把損ふが如し折角の盡力十分に到せざるハ云甲斐ふしとや稟すべき金剛の信を得〳〵ん者ハ生死ハ弥陀如来の打任せ〳〵り一心の死力を尽さん時ハおどろ突落すに難〳〵んやハ

未期の往生一條あり省て置給へと云も敢ず左右の袖を捲り上て忽ち二王の如き勇相顕ハし根際の索を聢与掴み両足大地ふ踏張つ曳〻一声叫く〻省へしが噫すきゝや此大木を地より三尺計り被ぎ上て おり〳〵と引摺出せ崖際へ押遣と省ハ大喝一声叫ふ〻等〻〻根本を崖へ打淳らすれバ雪頽の渓へ陥るが如く鼓々と高鳴して千尋の渓へ形幽に堕し入きバ是を省て敷万の門徒們瞻潰して怖畏おのゝき噫すほゝしの怪力やふ見ぬ世の辨慶義秀ハ卒知ず是ぞ人間所為に有べ〻ず将に西方教主の化現にや本寺の建立を扶け給ふ物ふるべし佛菩薩の方便に有ずんバ斯る奇特を省る例しふしと隠士を打省やりて頂拜し貪舌を巻てゞ恐れ〻り果

戸隠山の
隠士怪力を
顕はして
巨材を
澗水より
投を図

戸隠山隠士
玉堂画

して此溪川の季に到まゞ岐蘓川の流まと成て美濃國落合中津川に入同國大田川に合流し勢刕長島に到つゝ海に入是迫門徒們山川を押出し勢刕長島より海舩に繫き竟に洛り廻り上せて東六條烏丸に着引せむ之を御影堂の梁にぞ造立す教如上人門跡として住し給ひ先乃本寺を西本願寺と稱ド後の本寺を東本願寺と唱へ東西羽翼の如く睦親し門徒の渇仰盛に繁茂し日夜念佛の声和鳴し去此不遠の極樂淨土に裳を蹈膝を重る三心四修の輩歡喜踊躍して慈悲報恩の化縁肝に銘ド法性常樂の妙音八百歩の外に響音して實に本願寺一實の盛德鴻業万代不易の招提なり然るに信刕戸隱山の隱士古今不思議の怪力を出し梁木を曳出したる働き

尋常なるぬ行状ゝゝ教如上人傳聞有て不審給ひ急に人を信刕戸隱山に遣し貴人物を招ひ給ひ久るに住居し庵八在なゝにも隱士六曽て行方を埋め人に問ども知る者なし註鑿すべき樣なく都にかへり上人へ如此と稟し上るに上人も本意なき綽に思し召し其人相年齡尋ね給ふに年の程八六十余りにして髮半白の老叟なれども眼中鋭く色白くして言語鮮うに齒顯せず介相貌威有て猛くず六字称名の日課を懈怠ず何樣一向專修の信者ゝと相見つる者譚りなきバ教如上人寂思惟給ふ樣六十余りの老叟と聽ハ倘くハ鈴木源左衛門重幸の死せると者せて深く世を避存命有るも測り難し併正く摂刕小野原一戰の節澱川入水の夙説と謂亦洛北野村農夫権四郎方

にて悪徒又九郎に斬害を受果敢なく隕命せし共厥ち石山へも洩聽緯あり然有バ戸隠山の隠士を以て重幸〻〻も一定仕難し最も往昔より英雄の終を省るに面貌年齢能相似さる代人を使ひて死に替せ世乃視聽を暗ま〻躾る者是亦枚挙するに遑あらず始あれを終無者ゐ〻と雖も生ハ難く死ハ易き人命何ぞや輕卒に死すべ〻んや美雄能人を欺く〻謂バ是疑へバ鈴木重幸ゐ〻ん乎功有名遂て躬退けバ俺招く所を逸くも察知し住居を棄て躲さるゐ〻ん今東本願寺草創の期に臨めバ祖師聖人への恩禮の為奇縁の昔を思ひ出て衆人に加勢を属るゐ〻べし値遇んと思ふハ愚痴ゐれ共倘重幸ゐ〻バ藉生さる得ぐ〻き恩師〻思ふが故〻身を躲せし社猶憑しゐれ迎夫り

在り〻故塊呼の出に〻家居も憧〻て其近辺の門徒を頼も尋ね索めさせ給ひ〻共終に介在所を知緯ゐし不思議ゐ〻る緯共ゐり編者茲に比評の説〻て云世に箇様の珍説多く有播孫絅千近辺の村民某に一個の嫁有し所介姑の人或時外に出て童們が騙る蛇を愍〻孔方の贖を把せて蛇を助け之を遣乃流れ放ち遣る厥ち姑再び外に出る緯有々が時〻も一個の士来つ〻紙ゐ捻る物姑に恵〻俺ハ日外介に助けを受し者ゐり再生の慈恩を報ずんが為介へ聊進せん〻と思ふ物ハ則ち這紙包の中に有バ介一個〻て之を喰す家内眷族の人〻も分与へ平等に喰給へ〻し必ず無病長壽に到るべ〻〻て教へ〻竟ゐ別れ去り姑の人所要有を以て件

の紙包開ても省ず尓侭袂に入く家に帰り所要の綷まて之を打忘れ袂より出さず棄置々り此時右嫁の婦人ハ姑の衣裳を怙く収めんとして何心なく袂の裡を探り省れバ一固の捻り紙の包に有臭をかぐに甘味匂ひ甘り開き省れバ塊りる土ぐれの如き物を入こり弥甘味薫鼻を穿てば姑所持の物と思ひふ〻忍ず打碎く唇に味へバ得も云ぬ珍味の品〻なれバ竟に残らず皆喰尽しけり姑後小之を思ひ出して衣裳の袂を探し省れ共紙の包の有ざりしゆバ嫁を呼て尋ね問バ嫁ハ隠し秘まず喰しと答ふ姑驚きたる面色して云ける俺士の人より授りて之を尓一個して食すべ〻ず家内眷族の人へ分与へ平等に配當し喰給へ必ず無病長壽ふ〻んと示さる尓

時ハ何の注意もせざりしが俺士の人に知己もなし亦恵を受べき訳も非ず唯日外野遑通行の節里の童子們寄挙りて一匹乃蛇を翫び脳一丁々打殺さんと為るを愍み賄を把せて助け逃ず此他に心的りと思ふ士より物を受る綷なく旁以て不測たりして話せば嫁も今更心悪く物の名知ず食し綷の噫鈍まさ〻〻耻入々り此時嫁の齢二十四才と云自夫年累ねて姑も死去亦尓良人も死子も死孫曽孫玄孫迄も皆齢長くして死失々れども件の嫁なる婦人老さらバ〻ず黒髪ハ白〻て省ゆる〻雖も面ハ以前ろ些も変らず二十四歳の桃花の如し家續已に十一代相替つて年数三百十有余歳に述べ〻も此婦人健固に存命す故に人之を彿々婆々

と仇名す婦人も世乃嘲哢を深く厭ひ闔宅の人へ何共云遺さず何
國と的しらぬ立出々り家祖の老姫の家出ぬれバ闔宅の男女周章慌
忙人部索して諸所探すれ共更に在所ハ知ざりゝるゞ自夫亦十年余
り過て後老姫に知己の漢子丹波國へ到る縡あり多紀郡日置と
云山里へ入る折しも宿を把後れて山路ゝ惑ひ孤家の芒舍へ立
寄一宿を乞求めゝ岳が家の主ハ豈測らんや十年先に彼家出に逮ぶ
狒々の異名を貫老姫と互に打驚きて一宿を免し紐干へ帰りく
斯と告るに迎へ把んと尋ぬ行に再古郷へ帰らん心ぬきぬや是も家
を脱しく後躱しゝるゝぞ此話近曽の縡とぞ聽く

繪本石山軍記第三編巻之九